

# カメルーン・ヤウンデの若者により実践されるヒップホップ・カルチャー に関する研究

平成 17 年度入学  
派遣先国：カメルーン共和国  
矢野原 佑史

キーワード：カメルーン，ヤウンデ，若者文化，ヒップホップ

## 対象とした問題の概要

西アフリカに位置するカメルーンでは、失業率が 1997 年度の時点で約 60%（カメルーン労働組合連盟の報告による）とされ、現在でも徐々に悪化しているとみられる。このことは、社会のさまざまな面において問題を引き起こしており、特に現代を生きる若者たちにとっては、将来への絶望感を感じつつ毎日を送る状況を生み出している。本研究が対象とするヒップホップ・ミュージシャンを志す若者たちの場合、楽曲制作において政治批判的な発言に規制がかけられているという現実への不満や、生業として極めて成り立ちにくいミュージシャンという職業に対する夢と不安などが、精神的な面において複雑に交差するという問題を抱えている。特に、カメルーン国内ではマイノリティーであるアングロフォン（英語話者）たちは、それらに加えてさらなる不満を募らせている。



スラムの若者たち

## 研究目的

これまでの、アフリカにおけるヒップホップ・カルチャーに関する研究では、ヒップホップ・ミュージックで「ラップされる」歌詞の内容と若者がおかれる社会状況を照らし合わせる方法や、そこから汲み取られる政治や社会の現状に対する若者の思想を考察する方

法が主流であり、若者が実際におくる日常を通して身につけていく思想や行動様式の過程に着目し、そこから彼らが創造するヒップホップ・カルチャーを読み解こうとした研究は数が少ない。本研究は、カメルーンでヒップホップを実践する若者、特にマイノリティーであるアングロフォン（英語話者）に焦点を当て、彼らの日常の舞台であるスラムで彼らとともに生活し、彼らとともに楽曲を制作することで、これまでの研究者が研究の対象としてきた楽曲や歌詞が生まれる背景を考察することを目的とする。そこから、歌詞研究だけでは明らかにすることのできない、現代アフリカの若者が「日常で」直面するさまざまな苦闘と、彼らが抱えるさまざまな問題点、ひいては彼らの生きる姿そのものの理解を試みたい。



住み込んでいた家からの風景



スラムの自室でレコーディング

### フィールドワークで得られた新たな知見

今回の現地調査では、ヒップホップ・カルチャーを実践する若者（ラッパー、シンガー、DJ、ダンサー）たちとともに行動し、また彼らの多くが住むスラムに実際に住み込んで、彼らの日常を体験することで、創造される楽曲やダンスの源にある思考過程などの背景を知ることができた。具体的には、先行研究で主な研究データとして扱われてきた歌詞のなかに表現されていることが必ずしも彼らの本音ではないということが第一に挙げられる。スラムの長屋の一室である私のせまい部屋の中で私が曲の制作を任せられ、アングロフォンの若者がそれにラップ（歌詞）を乗せるという作業を繰り返すうちに知ることができたのは、彼らが、明確に楽曲完成後のプレゼンスとリスナーの反応をイメージして歌いわけているということであった。それらは、例えば、アメリカのマーケットに向けたもの、アフリカのマーケットや、カメルーン国内のリスナーに向けたもの、親へ向けたもの、そしてアフリカに興味を持つ「白人」へ向けたもの、といった具合であった。彼らはその都度、歌詞の内容を変化させて、「自分たちが表現したいもの」と「受け手が望むもの」とのバランスを計っていた。ゆえに、彼らの歌詞の内容だけで、彼らの真意の全体を読み解こうすることは極めて困難であると言える。彼らは、巧みに受け手を鼓舞するし、それによつ

て自らのラッパー像を臨機応変に構築し、また破壊して創造していた。彼らが紡ぐ言葉は、彼ら自身を代弁するものというよりは、彼らが想像力豊かに創造した「自分」という「他者」が放つものである側面が強かった。

これは、決して私が調査したカメルーンの若者だけではなくて、ヒップホップの本家、アメリカで活躍するラッパーたちにも当てはまることである。この点に留意しなければ彼らが創造する世界を理解することはできないし、逆に言えば、これを知った上で彼らの世界観や思想に着目してみると、現代アフリカの若者が持つ視点のユニークさや創造性の豊かさの魅力に改めて気が付く。それは、ジャマイカでラスタファリアンたちが、押し付けられた英語という公用語を自分たちの文化や経験で解釈し直して、それぞれの言葉が持つ意味の再構築を通して編み出したパトワ（注）とも遠からずつながる。それは彼らなりの自己アイデンティティ保持の手法であった。

カメルーンの若者は、将来に対する絶望感にまみれる自分を吐露するのではなくて、あえて、そこと対照的な位置にある輝かしい自分の虚の姿を創造することにより、ミュージシャンとしての成功を想定し、楽曲制作という行為自体を楽しみ、それぞれの技術と個性を成長させていた。その姿は、彼らにとっての音楽とは、何よりもまず希望と満足感に満ちた自分を保持して力強く生きていくための手段であると同時に、同じ境遇にいる者たちとの楽曲を通じたインタラクションも包含した娯楽であると感じさせた。彼らが心底から生み出そうとしているイメージは、つらい現状を生きる者がつらい現状への不満を吐く自慰行為などでは決してない、常なる不安をかき消すほどの楽しさを皆とともに味わうための音楽の姿であった。

（注）奴隷貿易によりジャマイカへ連れて行かれた人々が創造したクレオール言語。本来の英語とは語彙のみならず文法にも違いがあり、言葉の意味も彼らの思想を大きく反映するように意図的に再構築されている。例えば、図書館-Library とは西洋人が書いた嘘の本が所蔵されている場所を指し、自分たちにとって正しい本が所蔵されている場所は Trubrary とする。



調査者の制作した曲に合わせて歌詞を練る若者

## 今後の展開・反省点

調査期間内に調査しきれなかった点は多々ある。例えば、フランコフォン（仏語話者）の若者たちによる歌詞の採取と、アングロフォンの若者による歌詞との比較、また、フランコフォンの若者たちの思想や現状とその比較などが挙げられる。また、今回、調査対象者となった若者たちと共同で進めたプロジェクトの世間一般への提示が実現できなかったことは、彼らが私と共に懸命に取り組んでいた姿を思い出すたびに悔やまれる。本研究の今後の展開としては、実際にその成果をカメルーン社会や他のアフリカ諸国へ提示することで、カメルーンの若者が直面する問題、また、彼らの持つポテンシャルへの関心を誘い、現代アフリカの若者同士が意識面で共感を呼び合い、自ら現状改善にポジティブに取り組む姿勢を促がすことができればと思う。彼らに何らかの希望を与える結果をもたらすように研究の推進に努めたい。